

にぬりまけん つぼ
丹塗磨研の壺形土器

さいし
祭祀に使われた土器

約 2050 年前



出土遺跡 筑紫野市 貝元 遺跡

この資料は弥生時代中期の壺の上半分です。壺は、中に食べ物等を貯えておくための器と考えられています。

祭祀の際には供え物を入れておくために使われたものでしょうか。特に、表面にベンガラという赤色顔料を塗り、ヘラで丁寧に磨いた丹塗磨研土器は祭祀に使う特別な器として作られたもので、残りが良い部分は表面に光沢が見られます。丹塗磨研土器には大型品や特殊な形のもの、「暗文」という赤色の線が濃く見える技法を使ったものなどがあります。

土器を赤く塗ることは縄文時代から見る事ができ、埋葬遺構から多く出土します。赤は神聖な色として考えられていたようです。

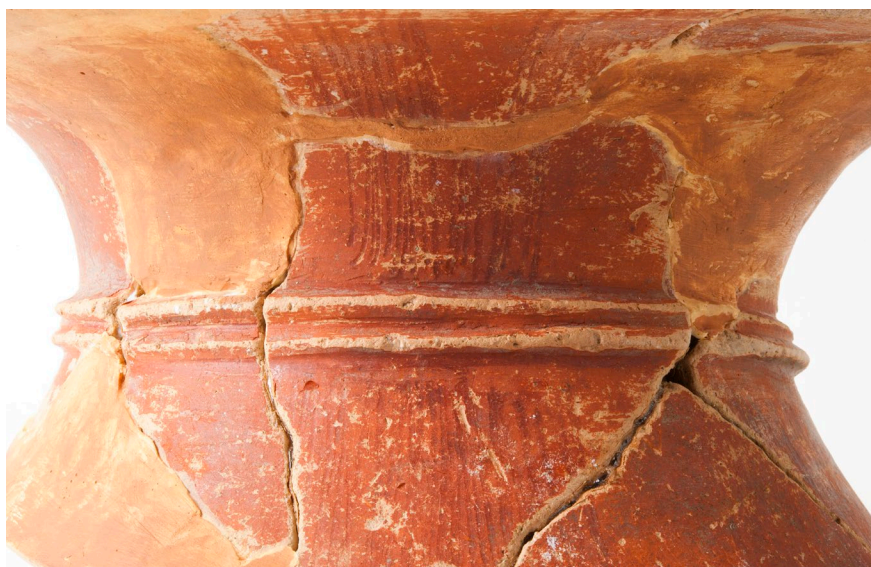
下線の付く言葉の解説は裏面にあります



1-5 何で赤い！？祭りの土器

暗文

赤色で描かれた文様ではなく、ヘラミガキによって表したもので、等間隔の平行線文がほとんどです。現在でも太陽の光を絵で表現する時に放射状の線で表すように、土器表面の光りを線で表現しているという説もあります。



ベンガラ

ベンガラは鉄鉱石である赤鉄鉱と褐鉄鉱を焼いて赤く発色させたものを、砕いて粉にしたものです。赤色顔料には水銀からとれる朱もありましたが、極めて貴重であったことから、水銀朱の代用品として比較的入手しやすいベンガラが縄文時代から使われてきました。

赤色顔料には悪霊や邪気を避ける効果があると考えられ、祭祀用の土器に塗布するだけでなく、墓の中に塗布したり、顔に塗ることもあったようです。

参考文献：福岡県教育委員会 1999 『貝元遺跡Ⅱ』
福岡県教育委員会 1996 『徳永川ノ上遺跡Ⅱ』
一般国道 10 号線椎田道路関係埋蔵文化財
調査報告第 7 集

写真：本館撮影



ベンガラで内面を塗布された
弥生時代の箱式石棺
みやこ町徳永川ノ上遺跡